

む じん とう
無 尽 灯

柳 幹 康



「まことに敬い貴ぶべきは見性の大義、弛ま
ず励み求めるべきは永遠の無尽灯である。僧侶
でありながらこの灯を伝えることができないの
であれば、あたかも薬を知らない医者、琴が弾
けない琴師のようなものだ。(灯を伝えぬ僧は、
仏教で大事にされる) 三宝のひとつに入る資格
がない」(『八重律』卷三) ——連載の最後とな
る今回は、白隠が重視する無尽灯について紹
介いたします。

無尽灯——尽きることが無い灯——とは『維
摩経』という有名なお経で以下のように説かれ
るものです。

たとえば一つの灯から百千の灯に火をとも
せば、(それまで)暗かったものはみな明
るくなり、(もとの)明るさも無くなるこ
とがない。このように皆の者よ、ひとりの
菩薩が百千の衆生を教え導き、この上なく

素晴らしい悟りを求めさせても、(もとの菩薩の)道心は尽きることがない。教えを説くにしたがつて、善法ぜんぼうは自ずと増えていくのだ。これが無尽灯である。

〔『維摩經』卷一「菩薩品」〕

灯から灯へ火を伝えれば輝きを増していくように、人から人に伝わるにつれ良き教えが増えていく——これを無尽灯というわけです。

白隠はこの無尽灯を「菩薩ぼさつの退転することなき堅固な姿を尊崇・讃嘆して名づけた」言葉であるとしたうえで、次のように述べています。

無尽灯というのは、真の見性と(人の分別・妄念を断つ)公案こうあんを灯とし、永遠に退転することのない堅固な心身を灯蓋とうがいとし、人々を教化し救済する偉大な慈悲の心を油とし、実相無相・根本不二の偉大な智慧を

灯火とし、あらゆる人々に対して(上中下という)三種の機根に応じて様々な教えを巧みに説き、一時たりとも怠ることなく永遠に勤め励むことを灯光とする。これを無尽灯と名づけるのだ。かえすがえすも常に貴んで養い増やしていかなければいけないのが法施利濟ほつせりさい(法おしえを施し人々を救済すること)、大慈悲心の油である。これこそが菩提ぼだい心なのだ。たとえばここにひとつの灯台があり、そこに幾千万の灯をかがけて四方を照らし出したとしても、油がなくなってしまうえば風がなくなるとも全て消えてしまい、真つ暗になつてしまうようなものだ。油は人々を救う偉大な慈悲の菩提心である。「菩提心がなければ皆ごとごとく魔道に落ちてしまう」というのは、このことを指すのだ。

〔『八重葎』卷三〕

このように白隠は無尽灯を構成する五種の要素——(1)灯にあたる見性と公案、(2)灯蓋(油を入れる皿)にあたる堅固な心身、(3)油にあたる法施・慈悲の菩提心、(4)灯火にあたる智慧、(5)灯光にあたる不断の巧みな説法——を挙げたうえで、(3)燃料の油こそが最も重要なのだと強調しています。油が尽きれば火が自ずと消えるように、法施・慈悲の菩提心がなければ自ずと魔道に落ちてしまうのだといっています。

この点について白隠は次のようにも述べています。「たとえ見性の眼が一度開けようとも、菩提心がなく無尽灯を伝えないのであれば、永遠に退くことなく階位を登ることはできない。その途中で怠惰に流れ邪道に落ちてしまう」(『八重律』巻三)。不退転の決意で常に前に進み続けられない限り、人は安逸に流れ墮落してしまうというわけです。

かかる不退転の決意として白隠が提示する誓

いの言葉を以下に引き、本連載の結びといたします。

永遠に退くことのない大勇猛だいゆうみょうの心を発し、常に(人々を救う)菩薩の実践に努め励み、無量の大法財だいはうざい(偉大な教えの宝)を遍く集め、絶えず大法施だいはっせに尽力し、(教えを学び、衆生を救い、煩惱を断ち、悟りを完成させるという)四つの誓いを不断に実践し、苦しみに喘ぐあえ一切衆生を助け、ともに無上の悟りを完成させよう。たとえ虚空が尽きようとも、この誓いは尽きることがない。

(『勸発菩提心偈かんぱつほだいしんのげ 附つけたり御垣守みかきもり』)

柳 幹康(やなぎ みきやす)

一九八二年栃木県生まれ。二〇一三年東京大学大学院博士課程修了、博士(文学)。東京大学東洋文化研究所准教授・花園大学国際禅学研究所客員研究員(副所長)。著書に『永明延寿と『宗鏡録』の研究——一心による中国仏教の再編』(法藏館)。

お願い

花園俳壇・花園歌壇

俳壇・歌壇への投稿は、それぞれ別の郵便はがきを使用し、各三句(首)までを読みやすく書いてお送りください。

*ペ切りは毎月1日です。

『花園』へのご意見・ご感想など

本誌へのご意見・ご感想など、「編集室花園係」までお送りください。

お待ちしております。

※住所が変更になりました。

送り先

〒616-8034 京都市右京区花園木辻北町1
妙心寺派宗務本所内編集室
俳壇／歌壇／花園 係

*住所、氏名を必ずお書きください。

*俳壇・歌壇ともに作品は未発表のものに限ります。(他誌投稿作品、転載は不可)

*なお投稿はお返しいたしません。

お知らせ

今月号をもって「いずれは一隻眼」「妙心寺の宝蔵から」「続 白隠の言葉を読む」「わたしの道」「餓羅苦多難記」は終了いたします。ご愛読いただき、ありがとうございます。
4月号からは、新連載が始まります。どうぞ、ご期待ください。

花園
hanazono

「いつもココロに花園を」
あなたとわたしのポケットエッセイ集

- 【花園】第72巻 第3号(通巻第847号)
令和4年3月1日発行(毎月1日発行)
定価55円
- 【発行人】野口善敬
【編集人】石田信行
【印刷人】喜田眞司
【発行所】京都市右京区花園木辻北町1
妙心寺派宗務本所 教化センター
振替／01060-9-1400
電話／075-463-3121

表紙の絵

「桜」



花寄りて輝き渡る春の光。

絵・正親 里紗(おおざりさ)

月刊『花園』1冊送りの年間購読料は、1,560円(税・送料込)です。
下記のお電話か、ホームページでお申込みください。

【妙心寺派宗務本所 頒布課】電話：075-467-2990

【妙心寺派直売店 web shop】

<http://www.myoshinji-shop.jp/fs/myoshinji/g05-0002>

*乱丁、落丁本はおとりかえいたします。